

催眠術師物語～催眠術師への道～

この物語は、私自身が催眠術に出会って、催眠術師の道に進むまでの出来事を書いたものです。

第1章 催眠術との出会い

「催眠術」

この言葉が、私の頭の中に突然浮かんできました。
まるで頭に電気が走ったような感じで、いつもと違う感覚に自分自身も戸惑っていました。
そして、私の足は自然に本屋へと向かい、催眠関係の本を二冊購入しました。
その中の一つの本に、こんな言葉が書いてありました。

『催眠術は、練習をすれば誰でもできるようになります』

私は、この言葉に衝撃を受けました。
なぜなら、私は催眠術というものは、何か特別な能力を持っている人ができるものだと思っていたからです。
そこで私は、こう思いました。

「誰でもできるのなら、やってみよう！！」

こんな感じで、私は催眠術師への一步を踏み出すことになるのです。

第2章 催眠術ってどういうものなの？

催眠関係の本を読んだり、HPを検索する日が続きました。
そうしている内に、なんとなく催眠術について理解できるようになってきました。
分かったのは、催眠術は自分が思っていた程、怪しいものではないという事でした。
そして、うまく活用すれば、人の心の悩みを改善していく、催眠療法という世界があるということも知りました。
しかし、知識は増えたものの、これぼっちも、催眠術を掛けられるようになる気配はありません。

第3章 催眠術初体験

私は、どうしても自分自身で催眠術を体験してみたいと思いました。

そして、HPで検索して、ある催眠心療所に行くことにしました。

ドキドキしながら扉を開けると、いかにも催眠術をやっているような姿をした人ができました。

そして、奥の部屋に通され、少し話を聞いた後に、待ちに待った催眠術を体験することに。

「うわー、指がくっついてきた！！」



私は、はじめての催眠誘導にビックリしてしまいました。

その後、手の平と手の平がくっついてしまう催眠術にもかかってしまいました。

私は、催眠術初体験に、とても満足して帰りました。

第4章 催眠術の練習

さらに催眠術への思いが強くなった私は、ある一冊の本を手にいれました。

その本は、誘導しているところが写真で載っていて、誘導のCDがついていました。

私は、ひたすらにこの本を見て、CDを聞いて、ある練習法を続けました。

部屋にイスを置いて、まるで人がいるかのように誘導する、いわゆる、ロールプレイングというものです。



そのおかげもあって、この本に載っている誘導文は、ほとんど完璧に覚えました。

第5章 実践

私は、練習を積み重ね、ある程度自信がついてきたので、実際に人に試してみたくなりました。

とは言っても、いきなりその辺の人に「催眠術を掛けさせてください」とは言えないので、家族や友達に協力してもらいました。

どこかの本に「催眠術を習得するまでの一番の壁は、被験者を見つけることである」と書いてあったのは、その通りだなと思いました。

『体の力を抜いて、両手を前に出してください』

「ぷぷっ（^^）」

なぜか、私が誘導しようとする、笑い出してしまう。

『あなたの手の平の中に風船があるのをイメージしてください』

「あははっ（^^）なんかいつもと声が違うから面白い」

こんな感じでうまくいきませんでした。

どこかの本で、「家族や友達は掛かりにくい」と書いてあったのを思い出しました。

それでもなんとか、腕の浮揚（腕が軽くなって上がっていく）や腕の開閉（両手が開いたり、くっついたりする）などの誘導は成功するようになってきました。

しかし、「これは、本当に私がやりたかった催眠術なのだろうか？」と思うようになりました。

「テレビでやっているような、催眠術を掛けられるようになりたい！！」

第6章 新しい出会い

何かスッキリしない気持ちのまま、日々の練習は続けました。

しかし、そんな私に新しい出会いが訪れます。

いつものようにパソコンで検索していると、【TRANS】というHPが目にとまりました。そこでは、催眠術師養成スクールを開催していました。

私は、ほとんど迷うことなく、行くことに決めました。

当日、キドキしながら行くと、すでに5・6人のスクール生が練習をしています。挨拶をすますと、南先生が催眠術を掛けてくれました。

「うわっ、手が開かない！！」

今までに体験したことのない感覚で、あまりのスピードと切れにビックリしてしまいました。

この後も、色々な催眠術を体験することができ、驚きと感動の連続でした。

そして、何よりスクール生のレベルの高さに驚きました。

「今まで、自分がやってきたのはなんだったんだろう？」

「なぜもっと早く、このスクールに入らなかったのだろうか？」

と思いましたが、「ここで練習すれば、催眠術は習得できる」と確信し、

「催眠術ってなんて楽しいんだ！！」

と心の底から思いました。

第7章 催眠術 OFF 会

このスクールでは、2ヶ月に1度、南先生主催の OFF 会がありました。

催眠術に興味がある人の集まりです。

初めて参加した時は、人数の多さにビックリしました。

カラオケ屋の部屋の中に、40人以上の人が集まっているのです。

「こんなにも、催眠術に興味をもっている人がいるのか！」

と私は嬉しくなりました。

同じ事に興味をもった人が、集まり、話をする。

「なんてすばらしい会なんだ！！」と思いました。

第8章 成長期

今まで、あれほど練習相手をさがすのに苦勞していたのに、スクールではそういう苦勞をしなくても練習をすることができました。

何より、人の誘導を見るのは、とても勉強になりました。

そんな環境の中で毎週スクールに通っていると、メキメキと私の腕はあがっていきました。

私は、いつの間にか、催眠術を掛けられるようになっていました。

そして、「今までやってきたことも無駄ではなかった」と感じました。

「もっともっと催眠術がうまくなりたい！！」

第9章 営業で催眠術

この頃、私は営業の仕事をしていました。

そして、仕事をしながらある事に気づきました。

「あれっ、これって催眠術と同じだ！！」

同じといっても、「あなたはこの商品が欲しくなる～」と言うわけではありません。

興味の引き方・見極め・クロージングのタイミング・気持ちの持ち方、商品売るまでのプロセスが催眠術と同じだったのです。

「催眠術って、様々な場面で活用できるんだ！」と実感しました。

第10章 路上催眠

もっと実践練習をしたいと思い、催眠仲間と路上催眠をしました。

場所は、都内の某公園。

イスと『催眠術体験』と書いた紙を置いて、興味をもった人に誘導するのです。

初めこそ人がよりつきませんでした。一人誘導に成功するとドンドンと人が集まってきて、いつの間にか数十人に囲まれていました。

15人中8人を幻覚域まで誘導でき、これまで経験したことのない大成功をおさめることが出来ました。

私は、楽しくてしかたがありませんでした。

そして、何より誘導した人の喜んでくれている顔を見ると、嬉しくなりました。

「催眠術って、こんなにも人を楽しませることができるんだ！！」

催眠術の素晴らしさを、あらためて実感しました。

私は、この路上催眠によって、圧倒的な自信をつける事ができました。

そして、催眠術の成功のポイントをたくさん知ることができました。

この日を境に、催眠術の成功率が上がったのは言うまでもありません。

そして、路上催眠が好きになってしまいました。

第11章 スランプ

「催眠術を掛けて欲しい」という声が多くなり、職場・飲み会・集まり・道端等、頼まれたらどんな場所でも誘導しました。

そして、私が催眠術師だということがどんどん知られ、ますます私の活動の場は広がっていきました。

しかし、ある時、いつものように誘導しているのに、思うような現象が起こらないようになってしまいました。

いわゆるスランプというやつです。

被験者の話を聞いていても、明らかに掛かりやすいはずなのに……

「なぜ？」

何度も考えましたが、いっこうに答えが出てきません。

そして、自信を失ってしまい、しばらく誘導をしなくなってしまいました。

第12章 スランプ脱出

しばらくスランプが続いたある日、人に頼まれたので仕方なく誘導しました。

「失敗してもいいや」

と思いながら誘導すると、なんなく成功することができました。
特に、誘導法を変えたわけでもなく、ただいつものように誘導しただけです。
それからというもの、以前と同じようにうまくいくようになりました。

私は、催眠術で大切なのは、自分自身の心の持ちかただと知ることができました。
自信を取り戻した私は、ワークショップを開いたり、催眠術ショーに出たり、さらに活動
の場を広げて経験を積み重ねていきました。

第13章 新たな道へ

二冊の本から始まった、私の催眠術師への道のり。
催眠術を通して、多くの経験をし、多くの気づきがありました。
そして、人間としても大きく成長したように思います。
私は、「こんなにも楽しくて素晴らしい催眠術を、他の人が知らないのはもったいない」
と思いました。

「よし、自分がこの催眠術を広めていこう！！」

そう決意をしました。
そして、催眠術師として新たな道を歩み始めました。
果てしなく広く、終わりのない道へと。

催眠術師/催眠心理療法士 中井英史